

# 大学院口腔科学教育部研究奨励賞研究成果報告書

口腔科学教育部口腔科学専攻 4年  
口腔顎顔面補綴学分野 藤本 けい子

研究課題名 咀嚼の主観的評価に関わる客観的評価の検討

## 1. 研究目的と成果内容

高齢者にとって食べることは、楽しみでありいきがいである。食事ができなくなると QOL は大きく低下し、咀嚼の満足度は QOL に大きな影響を及ぼす。歯科治療における短期的目標の中で最も重要なことは患者が満足することである。すなわち、治療により患者の主観的評価が上昇することである。高齢者の咀嚼に関して、主観的評価と客観的評価の関係性については様々な過去の報告がある。主観的には満足していても客観的には問題があり改善する余地がある場合や、逆に客観的には問題はないが主観的には満足していないという場合もある。

また、咀嚼運動は口腔機能全体が関係しているといわれているが、どのような機能が重要な役割を果たしているのかは解明されていない。過去の報告では咀嚼の客観的評価において口腔機能が関連しているとの報告はあるが、主観的評価との関連を調査したものはほとんど存在しない。

以上の背景より、歯科外来通院中の高齢者における「どのくらい嚙めるか」という主観的評価と客観的評価の関係を評価し、主観的評価の実態とそれに関連する口腔機能の評価指標を明らかにすることを目的として研究を行った。

本研究においては、咀嚼スコアと咀嚼能率は弱い正の相関を認めたが、咀嚼の VAS 評価と咀嚼能率は相関を認めなかった。食べられるかどうかを問う主観的評価と粉碎能力を測定する客観的評価は必ずしも一致せず、咀嚼の主観的評価は客観的評価だけでは説明できない面があると考えられた。また、より主観的な評価である VAS 評価において口腔機能の関連は認められなかった。BMI は主観的評価においてのみ関連が認められ、本研究において、患者の機能と嗜好に応じた食事指導や食事内容の提案を行うことの重要性が示唆された。

4<sup>th</sup> ASEAN Plus and Tokushima Joint International Conferenceにて Invited speakerにて咀嚼スコアと咀嚼能率検査について発表を行った。また上記内容をまとめ、現在 IF のある雑誌 (Gerodontology) に論文を投稿中である。

## 2. 自己評価

本研究により患者へ栄養指導や食事内容の提案を行うことの重要性が示唆された。今後は、縦断研究と介入研究を行うことにより、関連因子の因果関係を明らかにしていきたいと考えている。

## 3. 学会発表

Association between masticatory assessment and oral function  
The 4th ASEAN Plus and Tokushima Joint International Conference  
Bali, Indonesia December 1-3, 2017.

Keiko Fujimoto

(ビデオ発表)

## 4. 論文

なし